

1

向  
かう  
庭  
主

2

暗算  
着色  
波風

3

最後  
い本  
イ  
アウエ

工  
熱意  
覚悟

(7A・B 順不同)

自分の才能  
オ  
ラ  
しわ

(5 完答)

好きな個所  
ウ  
印刷  
音楽  
絵画

(6 完答)

連続性  
少しで

1  
1  
2

配点	
1	各2点×6=12点
2・3	各4点×22=88点
〈計〉100点	

1 「向」の内側を、「同」のように「一」↓「口」と書いてはいけない。  
2 「庭」の四画目を以降を「延」と書かないように気をつけよう。  
3 「主になる」とは、「中心となること」である。  
4 「暗」の筆順は「日」↓「立」↓「日」である。「算」の真ん中の部分は「日」ではなく「目」である。  
5 「着」の四画目と七画目を合わせて「ノ」としないように気をつけよう。  
6 「波風」とは、ここでは「もめごとや争いごと」という意味である。

2

1 線①の「三人」が「フルート科」の中から選ばれているのだから、フルートの奏者をさがしてあげよう。本文の1～7行目からユージ（自分）とサンドロがフルートの奏者であることがわかる。一つめの（中略）の1～10行後からマルタも同じくフルート奏者であることがわかるが、ジャンフランコはヴァイオリンを弾いているので、「三人」にはあてはまらない。  
2 サンドロは「後期中等教育校は卒業さえできればいい」、つまりどのような成績だって構わないと言っているのだが、それはなぜかを考えよう。勉強とはある意味で関係のない世界（ここでは音楽の世界）で生きていくと決めたからである。一つめの（中略）の十五行後に「けどサンドロは毎日三時間吹いている」とあり、毎日三十分しか練習しないマルタに「プロのフルーティストになるつもりは毛頭ないってことか」と言っているのだから、サンドロは「プロのフルーティスト」になるつもりだとわかる。  
3 直前に「ジャンフランコにいい返されて」とあるので、「眉間に③をぎゅっと寄せた」のはマイナスの気持ちからだと思われる。「眉間」とは眉と眉の間のことであり、「眉間にしわを寄せる」は不快な気持ちの表れとして用いられる表現である。

4 線④の直前の行に「マルタの顔に一瞬、動揺が見えた」とあるので、「迷って」いる理由はここよりあとにあると考えられる。線⑥の三行後に「あなたも迷ってるんだね。あたしだって」というマルタの発言があるのでここからあとをさがそう。  
5 「もともと⑤に入りたかったんだ」というユージの発言は、三行前の「ぼくは、なぜここ（Ⅱ国立音楽院）に何年も通っているのか」という自分自身への問いかけの答えであることをまずおさえよう。直後の「第一オケ」は字数に合わないのだから、ユージが国立音楽院に入った「もともと」の理由をあらわす六字のことばをさがそう。

6 「あてはまらないもの」を選ぶことに注意しよう。ハイレベルな「第一オケ」に選ばれたので、エの「フルートが上達しない」はあてはまらない。他の記号は、線⑥の二行後のユージの発言を聞いたマルタが告白した悩みに同意したり、一つめの（中略）のあとで「才能」について考えたりしているところに書かれている内容にあてはまる。  
7 一つめのA・Bの直前の「マルタのいうように」から、どちらもマルタの発言から考えればいいとわかる。②の四行前に「ま、それが才能ってやつかもしれないけどね」とあるので、「それ」がさしている「熱意」がまず答えとなる。②をふくむ発言の中で、「熱意」という「才能」を持つサンドロに対して「すごい覚悟だね」と言っているのだから、もうひとつの「才能」は「覚悟」ということになるだろう。

8 Ⅱにはユージが使っている楽器がはいる。本文のはじめの場面でマルタとユージが会話をしており、「あの安物のフルートであれだけの音出してくだから」とマルタがユージに言っているのだから、ユージが使っているのは安物のフルートだとわかる。（Ⅰ）には「安物のフルート」を使い続けなければならない理由がはいるが、線⑦をふくむ文の直後の文で「これは自分の力では乗りこえられない壁だ」とあるので、ユージ自身のせいではない問題をさがす必要があるとわかる。一つめの（中略）の二行前でユージが「うちなんか、たぶんマルタちゃんよりもっと家計が苦しいからさ」と言っていることに注目しよう。  
9 ⑧には、「フルート」や「オーケストラ」が出すものがあることがわかる。本文の一行目に「あの安物のフルートであれだけの音出してくだから」とあることからわかるだろう。

3

1 線①の直前の「途中でやめてよい本」については本文の二～三行目で説明されており、本文四行目からの段落で「これに対して」という形で「やめられない本」について説明されている。  
2 ア～エのそれぞれをイメージして「流れる時間をそのまま体験する」ものと「自分の持ち時間に合わせて観賞できる」ものに分けよう。

3 本文のここより前で「絵画」について説明されている三段落目に注目しても、ここには書かれていない。この段落のはじめの「それに対して」、一つ前の段落のはじめの「これに対して」に注目してさかのぼっていくと、「途中でやめてよい本」の説明にたどりつくので、この段落からさがそう。

4 「絵画的な読書を受け入れる」とどうなるか、と考えよう。A・Bをふくむ段落に「本書の読書術で読んだほうが楽に、かつ効率よく読み進められる」とあり、最後まで読破するには、『絵画的な読書』が適しているのだ」と書かれている。  
5 「音楽的な読書」について聞かれていること、◎の文が「文学作品は」となっていることから、この両方について説明されている五・六段落目の中からさがそう。

6 Aの前に「こうした」とあり、これが「音楽的な読書」をさしているのだからAには「音楽」、Bには「対極」の「絵画」がはいることとなる。  
7 線⑤の直後の一文が「それは」からはじまっているので、まずここからあとに注目しよう。（Ⅰ）には「音楽的な読書」の読み方があるので、それについて説明されている二・五・六段落目からさがそう。（Ⅱ）には最後の段落に書かれている筆者の考えがはいる。

8 Ⅰ一般的な文学作品については「音楽的な読書」を認めつつ、それ以外については「絵画的な読書」をすすめている。  
Ⅱ 「絵画的な読書」を提案するということは、ふだん多くの読者は別の読み方（音楽的な読書）をしているということである。  
Ⅲ 本文の最後の段落に「一部を囁き読みすることも大切だと私は考える」とある。

以上